
津田ロワイヤル

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

津田ロワイヤル

【Nコード】

N1109M

【作者名】

ハル

【あらすじ】

完全パクリのストーリー！！
結構自分らしさが出てると思うので最後まで読んでね！！
読まなかったらウンコ

始まり

今、自分の目の前にはクラスメンバーの死体が転がっている…何故こんなことになってしまったのだろうか…

数時間前……

俺たちは勉強合宿でグリーンホテルに来ていた。バッグを自分たちの部屋に置き勉強道具だけ持って教室に向かうと机には袋が置いてあった。

そしてその教卓には知らない人が立っていた。そしてその隣には明らかにいい肉体をしているマツチヨが2人立っていた。

その2人の手には銃がかかげており、女子の一人がその銃を見て悲鳴をあげた。

「キヤアアッー!!」勢いよく扉から逃げようとした瞬間、
「バタン!!」

勢いよく扉が閉まった。「えっ!?何これ!？」扉を押しても引いても開こうとせず外から鍵がかかっているようだった。「どうなってるの!?開けてよ!!」

その女子生徒は開かない扉に何度も蹴ったり叩いたりしてるが無駄のようだった。

周りも騒然としていた。

「パンッ」

その時、とても乾いた音がした。

マツチヨの一人が銃でその扉の前で騒いでた女子生徒めがけて発泡

した。一瞬だった。

そして教卓の前に立っていた男が言った

「お前ら、これから騒いだやつは発泡するからな。」

とても冷淡な口調だった。

寒気がするほどだった。「とりあえず席に着け。」

皆は恐怖のあまり固まっており動けなかった。

「早くしろ！！！！」

その男の怒声で皆は慌てて席に着き静寂が訪れた。

「よし、お前たちには今からテストを受けてもらう」

意味が分からなかった。何故こんな状況でテストを受けなくてはいいけないのだろうか。

「科目は数学の一教科だ。一つ言っておくが先生どもは殺しておいたからテストが邪魔されるは心配ない、携帯電話もここは山の中だから電話は通じない」

え…顔が青ざめるのがわかった…唯一の助けとなる先生が全員殺されたなんて…信じたくなかった。

「今からするテストは今後かなり影響するから、真剣に解いたほうが身のためだ。それでは始める」

バトルスタート（前書き）

ご希望により名前を出して欲しいとのことで名前を出します。

男子は名前出しますが女子は出せません。

ご了承ください。

特に前書きはないけど最後まで読んでね。

バトルスタート

「カリカリ……」

ペンの音だけが聞こえる。

今自分の隣にはさっき打たれた女子生徒の死体の血が流れていた…
吐き気がした。

とても冷静ではおれなかったが騒いだら自分も殺されると思い何とか耐えた。

そして20分後……

「終了だ。ペンを置け。今から10分後点数を言うからそれまで今から始めるゲームのルールを説明する。」

ゲーム……？

「今からお前たちに俺達が支給する武器で殺しあってもらう。誰か一人が生き残るまで。」

場が凍った…。

今すぐにでも逃げ出したくなった。

だがマツチヨの2人組の男は銃を持ってるから逃げだそうにも逃げれなかった。

そして男は話を続けた。「さっきやってもらったテストには意味が

ある。今、目の前に袋があるな。その中には銃やナイフなどが入っている。さっきのテストの結果によって武器が決定する。もちろん点数が良かったやつは強い武器が支給される。」

男は淡々と言った。

「テストの結果が良かったものは武器を持ち先にここから出る。隠れる事も出来るしかなり有利だ。」

言葉が出なかった…。

俺達がは勉強合宿に来たのに何故こんな事をしなくてはいけないのだろうか…。

「テストの採点が終わったようだな。今から名前を呼ぶから呼ばれたやつは前に来い。」

1位塚田健太郎！」

やはり健ちゃんが1位だった。

もともと数学は最強に賢かったので当然だろう…。

「2位早川立起！3位夏川将実！……………」

どんどんと名前が呼ばれて言った。

「7位飯場由和！」

その時、飯場は明らかに様子が違った…。

殺意が丸出しだった…。

そして袋をもらい袋の中を覗き中から銃を取り出した…。

また乾いた音がした。

次の瞬間飯場は倒れた。腹からは大量の血が出ていた。

「飯場！！！！」
皆が叫んだ。

そしてさっきまで倒れていた男が立ち上がった。

「いきなり打ってくるとはね…これは罰が必要だね」

男は防弾チョッキを着ていたのだ…。

そして懷から銃を取り出し倒れている飯場めがけて乱射した。

「キャアアー！！！」見るに絶えない光景だった。

「今度からこういう奴がいたらこうなるからな。」

部屋は恐怖に包まれた。

「邪魔が入ったが名前をまた呼ぶからな」
何事もなかったように言った。

「13位平野温也！」
ついに自分の名前が呼ばれた。
俺は前に行き袋をもらい部屋を出た。

廊下に出るとそこは静まりかえっていた。

物音一つしなかった。

出口となる窓は防弾ガラスでビクともせず扉には男が立っていた。これまたマッチョなやつだった。覆面をして顔が見れなかった。

そして俺はとりあえず一つの個室に身を潜めた。

それから30分程すると放送が聞こえた。

「これで全員部屋から出た。今から24時間の間殺しあいをしてもらう。24時間内に決着がつかなかったらここを爆破する。食料と飲み物は袋に入ってるはずだ。

去年もここに来てるはずだから場所は大体わかるはずだ。

説明は以上だ。

ゲームスタートだ。」

殺し合い（前書き）

仲の良かったと思う人達が皆、敵となった…。ハラハラドキドキで見たら止まらない！
最後まで読んでください！

殺し合い

「ふう……………」

俺はため息をついた。

静かな個室で一人になり少し安心したが気は抜けなかった。

いつ誰が遅ってくるかわからない、俺も飯場やあの女子みたいに殺されてしまうのか…。

とりあえずさつき奴らからもらった持ち物を確認した。

「飯場が7位で銃だったからな……………」

一人で呟き、中を見ると果物ナイフが入っていた。

「まあ13位だしこんなものか、だとしたらドベの奴は何が入っていたのだろう…」

どうでもいいことを考えていると…

気のせいかな急に室内の気温が上がった気がした。

「熱い……何だ？」

扉から凄い熱気が立ち込めてきた。

十分に用心し扉をカチャリと少しだけ開けてみると

奥の廊下の壁やカーペットが燃えていた。

「何だ……これは……」

そしてそこには黒焦げ死体があった。

「…ッ！……！」

叫びたかったが自分の場所がすぐ相手に分かり自分も殺られるかもしれないので我慢した。

多分……女子の死体だろう。真っ黒で何が何だか分からないがそれぐらいならわかった。

これで人数は22人となった。（フミヤ、キョウスケ、ジュリアンと後一人誰か女子が休み）

「マジかよ……」

まさか、まだ始まって間もないのに死亡者が出るとは…。

「このやろっ！！！」

叫び声が聞こえた。

多分この声は亨ちゃんだろう…。

早足で声が聞こえた場所に向かうと、そこには亨ちゃんともう一人吉留がいた。

亨ちゃんの手には日本刀があった。
かなり強そうな武器だったが相手が悪かった。

吉留の手には火炎放射機が握られていた。
相当でかく威力もあるように見えた。

亨ちゃんは端に追い詰められ逃げ場がなかった。「来るな…やめろ！！」

吉留は躊躇なく火炎放射機をはなった。

「熱い！！！！助けてくれ！！」

亨ちゃんは炎に包まれやがて動かなくなった…。

吉留は日本刀を拾い上げ腰に装着した。

そしてこっちに戻ってこようとし俺は慌てて身を潜めた。

「危なかった……。」

何とか一安心し息をついた。

多分あの女子も吉留がやったのだろう、だけど火炎放射機何てかなり強い武器だが吉留は一体何位だったのだろうか…。

ここにいと危ないと思い場所を移動しようとした瞬間。

「ガチャ…」

後ろから頭に銃を突き付けられた。

「温也か…?」

俺はゆっくりと後ろを振り返ると田村がいた。

「田村じゃん!! 良かった〜! マジで俺もう死んだかと思ったわ!」

「いや〜…まさか温也とは思わなかったわ、とりあえずここ目立つ

で目立たん場所行こ。」

田村に言われた通り場所を移動した。

そして最初皆が集まった教室に移動した。

飯場と女子の死体があつてあまり気は進まなかったが田村が「最初出たスタート地点にはあまり人はいかんもんやでさ。」と言つたので、その通りだと思つた。

部屋に入り、まず田村に聞いた。

「その銃つて田村の物？」

「そうやけど、何で？」

「その銃つて飯場が持つてた物と一緒に見えたから……。」

「ああ……なる。実は俺テストの結果飯場と同じ7位何だわ。」

田村は昔勉強あまり出来なかったが今はかなりいい。7位とかやるな。

そして田村は俺に質問した。

「温也の武器は？」

「果物ナイフ」

と、さらっと言った瞬間

「ドンッ！！！！」

弾が俺の顔をかすめた…。

「死ね。」

そう言々と田村は乱射してきた。

果物ナイフがよっばど気にいらなかったのだろうか…。

「そんなカス見たいな武器で一緒に居れるか！！」

ヤバイ！！

死ぬ！

何とか伏せて避けたが逃げ場がなかった…。

だが……飯場の近くに何か光っているものが見えた。

あれは……銃か…？

飯場が死んで飯場が持ってた銃がそのまま放置されていたのか！

俺は何とかそれを手にし田村に照準を合わせた。

そして互いに引き金を引いた。

D a n g e r ! (前書き)

ハラハラのストーリー！現在絶体絶命の危機！果たしてどうなる！

D a n g e r !

部屋に銃声の音が響いた……

俺は生きているのか……？

特に痛いところない。

だが体中にベツトリと血がついていた。

どうやら飯場の血で滑り何とか銃弾をかわせたようだ。

田村は右肩に弾が当たったらしく肩をずっと押さえていた。

「いてえ…………やりやがったな…………。」

田村は足取りがふらふらで今にも倒れそうだった。

「ここはひとまず引き上げるか…………。」

田村は部屋からゆっくりと出ていった。

危なかった…飯場に感謝しなくてはいけないな。

「田村……………」

殺そうとしてきたが心配だ…。あの傷ではいつやられるか分からない。

田村の肩から流れていた血をたよりに田村の後をこっそりつけた。

田村の後についていくと運悪く敵と遭遇してしまった。

相手は女子の集団のようだ…。4人のようだ

俺はこっそり身を潜め成り行きを見ていると…

「ドンッ！！！！！」
田村が急に発砲した。

その弾は女子の頭に直撃した。

中からいろんな物が飛び散った。

「キヤアアアア！！！！よくもやったわね……！！」

その途端女子はバッグから金づちや竹刀やトンファーを取り出し田

村に向かって全速力で走った。

「何ッ！？やめろ！！」

その瞬間田村はボコボコにされた。

頭を金づちで殴られ脳ミソが飛び散った…。

「死んだ……？あなたが発砲するから悪いのよ…アハハハハッッッ

「！」一人の女子が叫んだ。

「こいつの武器も持っていきましょう。後で役に立つかもしれないから。」

さっき叫んでた女子が田村が持っていた銃を拾った。

次の瞬間…「ドンッッ！！！」

銃を持っていた女子が仲間の一人の女子に発砲した。

「グハッ……！何すんのよ……！！」

弾は足に命中して大量の血が飛びちった…

「どうせあなたたちといても生き残れるのは一人いいじゃない。死んでも。」

「え………一緒に最後まで生き残ってあの覆面の奴らを倒して脱出するって言っただじゃない！！」

「五月蠅いわねえ……早く死ね」

「ドンッ！ドンッ！ドンッ！」

銃を持ってた女子は足を撃たれた女子に乱発して息の根を止めた。

「キャアアッッッ！！」もう一人一緒にいた女子が逃げ出した。

「何、逃げてんのよ……待てって。」

「ドンッ……！」

発砲して銃弾は頭に命中した。

「逃げるから悪いのよ。あなたたちの武器ももらってくわ。じゃね
っ」

その女子はスタスタとその場から立ち去った。

危なかった…。もし俺も見つかってたら殺されていただろう。

冷や汗を拭い俺もその場から立ち去とうとすると

「ピンポンパンポーン……」

どこからともなく変な音が聞こえた。

何だ……？

「今戦ってる生徒の諸君聞こえるかな？ 見てるこちらがわとしては面白いがまだいまいち何か足りない気がする。そこでだ……今からお前たちにミッションを言い渡す。」

ミッションスタート！（前書き）

いよいよ始まったミッション！最後まで生き残るのは誰か！？

ミッションスタート！

ミッションだと……？

「ミッションの内容を言う。現在人数は18人男子14人女子4人だ。そして現在時間は12時間を経過した。」

もう12時間たったのか…色々な事がありすぎて時間の経過があったという間だった。

「それで現在18人だ。このペースじゃ決着がつかんな…そこで今から3時間以内に一人殺せ。」

な……！？

「俺って優しいだろ？タイムアップで爆死しなずに済むんだぞ？というわけでスタート。」

これはヤバいことになった…。

一人殺さないと自分が死ぬ。

クラスの皆には悪いが生き残るためにはしょうがない！

そう思った瞬間音が聞こえた。

チツチツチツ……

音が聞こえた時反射的に体が動いた。

「ドーンッ！…！」

さっきまで俺がいた場所は丸焦げになっていた。

これは…地雷か…？よく周りを見るとかなり小さいが丸っこい点がそこら中に見えた。

あの小ささであの威力とは…高ランクの武器だな。

よく見ると遠くに男子生徒らしいのが見えた。
遠隔操作で爆破させてるのか！

「ドーンッ！…ドーンッ！…！」

周りが爆破して視界が煙に包まれた。

この隙に！！！！

「サッ！！」

何とか通路を曲がり爆発をやり過ごした。

そして周りに爆発物がないのが確認しさつき爆破した通路を覗いてみると将実がそこにいた。

「チツ…殺したと思ったんやけどな…」

将実は舌打ちをし周りに地雷を仕掛け始めた。

辺りを警戒しつつその場を離れさっきいた場所に戻っていった。

安全な場所で待機し地雷の場所に人が来たら爆破させてるらしい。

そして様子を伺っているとそこに征矢野がきた。

手にはボウガンを持っており辺りを警戒しつつ歩いている。

そして地雷の場所に足を踏み入れた途端…

「ドーンッ！…ドーンッ！…」

一斉に爆発が起こりその瞬間、征矢野の片足が吹っ飛んだ。

「ぐっ……………」

足からは大量の血が滴り落ちた。

「ぐ……この野郎……!!」

そこでボウガンを将実のほうへ向け発射した。

「ドシュ……」

ボウガンの矢は将実の肩に命中した。

「いってえ……クソ野郎が!!」

痛みで苦しみつつもその手にはがっしりとリモコンが握られていた。

[illegible]

「死ねっ！！死ねっ！！」

リモコンのボタンを連打し爆発が無数に起こった。

「ははっ！！これで死んだか…？ヒヤッホッ！」

将実は肩を抑えつつ不気味な笑顔でその場を立ち去った。

「ぐっ……………」

そこで呻き声が聞こえた。

征矢野は片足で歩きつつ少しだけ爆発が回避することが出来ていた。

何とか息があるがほぼ瀕死の状態だった…。

「……………そこにいるのは……………温也か……………?」

途切れ途切れの声で征矢野が喋った。

「頼みがある……このまま生きててもどうせ殺られるだけだ……だから今から殺してくれ……。」

「ドーンッ!」

「スマン征矢野……。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1109m/>

津田ロワイヤル

2010年10月27日01時14分発行